草ケ部の古代史考

丸谷憲二

1 はじめに

岡山市東区「草ヶ部」の地名の由来に日下郷説がある。平安時代中期、承平4年(934) 頃成立の百科事典『和名類聚 抄』に、「備前国上道郡九郷の一つ日下郷」とある。「日下」を「くさか」と読むのは難しい。「くさか」であって「くさかべ」では無い。古代史の「くさかべ」の表記は「日下部」と「草壁」である。備前国では「草ヶ部」と表記されている。天武天皇(631~686)と持統天皇(645~703)の間に生まれた「草壁皇子(662~689)」に注目し、吉備の名前を冠した吉備内親王(~729)について考察したい。地名学による考察である。

2 クサカベ地名一覧表

クサカベという地名は吉備国に 5 箇所ある。香川県小豆郡内海町も吉備国である。吉備国の表記は「草壁 2・草加部 2・草ケ部 1」であり、草壁皇子と解析すべきである。

国の技能は「中主と「中加印と「中)印1」とのう、「中主主」と所加すべきとのも。							
クサカベ地名一覧表							
草部	愛知県	新城市富岡	草部				
日下部	愛知県東加茂郡旭町川ケ渡日下部						
草壁	京都府	綾部市丹波大町					
草部	大阪府	堺市西区	草部	日部神社			
日下部	愛知県	稲沢市	日下部中町	草部(日下部)神明社			
日下部	鳥取県ノ	(頭郡八頭町	日下部	日下部神社 下日下部神社			
草ケ部	岡山県	岡山市東区	草ケ部	『和名抄』の備前国上道郡九郷の一			
				日下郷説			
草加部	岡山県	真庭市	草加部				
草加部	岡山県	津山市	草加部	仁徳天皇の皇女若日下媛命(草香幡 梭姫			
				皇女、雄略天皇の皇后)の御名代地説			
草壁	岡山県	矢掛町	草壁	備中国草壁荘 (小田郡矢掛町横谷周辺)			
				備中国草壁荘(小田郡矢掛町横谷周辺) 仁徳天皇の皇子「大日下王(大草香皇子)」			
				の御名代地説			
草壁	香川県	小豆郡内海町	草壁本町	草壁皇子の御名代地説			
草部	熊本県阿	可蘇郡高森町	草部	草部吉見神社			

3 草壁皇子と吉備内親王

草ケ部と表記される理由は草壁皇子との直接的な関係ではなく、草壁皇子(662~689)と元明天皇(661~721)の次女である**吉備の名前を冠した吉備内親王**(~729)との関係であろう。「**草ヶ部」は草壁皇子と吉備内親王の御名代地**と考える。御名代地とは、令制前、王族管理の部民。特定地域の居住民に、王族の名や、その居所にちなんだ名を冠したものである。草ケ部は草壁ではなく草ケ部と表記されている。

3.1 吉備内親王

吉備内親王(686頃~729)は、草壁皇子と元明天皇の次女。長屋王の妃。長屋王の変で自殺に追い込まれた。吉備内親王は長屋王に嫁ぎ、膳夫王・葛木王・鉤取王を産んだ。和銅8年(715)に、息子達が皇孫待遇になる。神亀元年(724)に二品に叙される。しかし、神亀6年(729)、長屋王の使用人であった漆部造君足と中臣宮処連東人の密告により、長屋王が国を傾けるため「左道」を行ったとして自刃に追い込まれた。吉備内親王も、3人の息子達と共に縊死した。当時皇太子基王が急死し、自らも病弱であった聖武天皇に万が一の事があれば、天皇の叔母にあたる内親王やその子供達の皇位継承の可能性もあった。吉備内親王は長屋王と生駒郡平群町梨本字前773番地(直径20m×高さ2m程の円墳)に埋葬と宮内庁が明治34年に治定している。しかし、長屋王夫妻墓の位置は明確ではない。草壁皇子は天皇として即位することなく享年28歳で逝去している。

3.2 長屋王の変

729 年に起きたのが「長屋王の変」である。この事件を契機に皇族の手から藤原氏へと権力が移った。元明天皇死後、今まで皇族側にあった政治の主導権を手にしたい藤原氏は、724 年、首皇子の即位を強行した。ここに藤原氏出身の母を持つ初の天皇である聖武天皇が誕生した。さらに聖武天皇妃で藤原氏出身の安宿媛が皇子を出産。勢いにのる藤原氏はこの皇子を皇太子に立てたが、その翌年皇子は他界した。皇族勢力を押さえるための持駒をなくした藤原氏は、左大臣・長屋王(684~729)とその妻で元明天皇の娘でもある吉備皇女、そしてその息子3人の王子を死に追いやってしまった。それが「長屋王の変」である。729年2月のある日、藤原不比等の息子・藤原宇合らに率いられた兵士が突如、左大臣・長屋王の家を囲み、その二日後、長屋王は自殺に追い込まれた。その後を追い吉備皇女とその息子たちも自殺した。『続日本紀』の記録である。長屋王の罪状は、「ひそかに左道をもって国を傾けようとした」というものである。長屋王の変から半年後の729年(天平1)、光明子は臣下の娘として初の皇后となった。

4 森神社と吉備内親王

『岡山市の地名』は森神社を**王子権現**と表記している。この王子を考察したい。長屋王の正妻は吉備内親王である。長屋王の変で自殺している。『木簡に現れた長屋王と吉備内親王』に、平野邦雄氏(東京女子大学名誉教授)は、「三つの宮の名前を申しましたが、これらはいずれも外部からこの宮を呼んだ名前なんですね。吉備内親王の北宮、**長屋王の王子宮**、それから、永高内親王の親王宮、これは、皆外部から宮を呼称した総体としての名前であることが一つの特質であろうかと思います」と説明している。

王子権現とは長屋王の王子宮縁の名前であろう。長屋王邸宅から長屋王木簡が5万点出 土している。**森神社は吉備内親王縁の宮と考える**。

森神社の登記簿は岡山市草ヶ部字旨畑ヶ 714 番 境内地 228 ㎡ 官有第一種とある。 官有第一種とは皇室に関係がある神社の土地である。「皇室に関係がある」を吉備内親王と 推定した。立河神社は神社財産として登記されている。森神社は管財局が管理している。

森神社の南にある字森前のブドウ畑から大小さまざまの土器のカケラが出土している。 周辺で採取された土器片について岡山市埋蔵文化財センターの鑑定では、「**茶色の土器が埴**

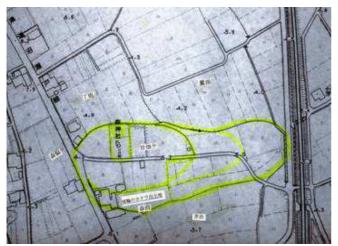
輪、灰色は須恵器などで、6世紀から13世紀までの弥生式や須恵器の祭器などの土器に混じって、埴輪のカケラもある」と中西厚氏が報告している。





森神社

神社の本殿のある境内は周りの畑よりも 2~3m こんもりと盛り上がっており、円墳と推定していたが中西 厚氏の「旨畑ヶの古墳と埴輪出土地」の地図から**前方後円墳**である。 前方後円墳は、日本における古墳の一形式で 3~7 世紀頃にかけて盛んに造成された。



旨畑ヶの古墳と埴輪出土地



出土した須恵器等(中西 厚氏採取)

4 立河神社の石垣

立河神社(岡山市東区草ケ部 1747) 由緒写しが中西 厚家に所蔵されている。備前国総社神 名帳に記載のある 128 社の一で、神位「従五位上立河大明神」とある。江戸時代は立河大明神と奉称し明治 2 年に立河神社と改称した。明治 6 年郷社に列せられた。藩政時代に杜 領は一石六斗であった。現在の祭神は、高おかみ神、闇おかみ神、罔象女神である。

石垣に注目したい。岡山県下で一番きれいな社寺石垣である。草ケ部の立河神社石垣は、 比叡山の土木御用を務めていた石工集団・穴太衆による石積み技法「穴太衆積み」である。 加工しない自然石を巧みに用いて美しい石積みが構成されている。岡山城にも採用されている。立河神社本殿の十六菊と末社の十六菊は誰を祀っているのか。その皇族が森神社古墳の埋葬者だと考える。





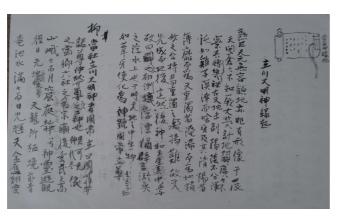
立河神社



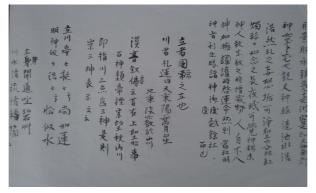
熊山参拝所



摂社 皇室の十六菊







5 国指定史跡 大廻小廻山城

大廻小廻山城は古代山城である。域内面積 38.6ha (指定地面積 76.0ha)の広大な遺跡である。鬼ノ城から 7世紀末の土器が出土している。大廻小廻山城の築城も 7世紀末と推定される。瀬戸内沿岸の古代山城では、667年築城の屋嶋城(高松市)と 665年築城の長門城(山口県)は日本書記に記録があり、鬼ノ城と大廻小廻山城の記録が無い。つまり、吉備国の記録は日本書記から抹消されている。当時の国家権力との関係で抹消されたものである。

5.1 神護石

大廻小廻り山の城塁には一の木戸、二の木戸、三の木戸といわれる谷を渡る処に石垣が築かれている。あとは土塀である。しかし土塀の基礎に神護石(こうごいし)と呼ばれる列石が並べられている。「神籠石」という名称は、明治31年高良山遺跡が学会に紹介された際、列石遺構の呼称として誤って「神籠石」が用いられ、その後九州各地で確認された同様の遺跡も「神籠石」と呼ばれるようになった。本来は高良大社参道脇にある「馬蹄石」と呼ばれる露岩の元々の呼称が「神籠石」であり、高良山縁起では、列石遺構は「八葉の石畳」と呼ばれていた。神護石は高良大社(福岡県久留米市御井町)の聖域で列石が下にあるものから命名された。築城した渡来人は高良大社の祭神高良玉垂命の一族であろう。

高良玉垂命に比定される「**天明玉命(玉祖神)=天目一箇命(鉄鍛冶神で、天津彦根命 の子神)」説**がある。九州王朝の倭王説がある。

①『大廻小廻山城跡発掘調査報告』に、「小廻山山塊の西側屋根の稜線直下で**銅鐸が発見** されている。」、②「この盆地の南西部から旭川下流左岸の北東縁辺部にかけての谷々で、 **鉄滓(スラッグ)の散布**が認められ、その一帯に製鉄遺跡の所在が想定される。」と指摘 されている。

5.2 大廻小廻山城の廻(さこ)の語源「迴紇」

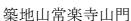
岡山県では大河が廻山と呼称している。加茂岩倉遺跡(島根県雲南市・旧大原郡加茂町大字岩倉字南ケ廻)の字名「廻」に注目したい。島根県松江市に大廻氏が多い。廻は「めぐり」ではなく「さこ」と呼称すべきである。『岡山県名字牽引』に、古峪氏と小廻氏がある。峪、廻は小さな谷、山の尾根と尾根の間を意味している。

「ウイグル」は、中国の史書『旧唐書』列伝第一百四十五に、「迴紇(ウイグル)」と表記されている。ウイグル(Uyghur)は、 $4\sim13$ 世紀に中央ユーラシアで活動したテュルク系遊牧民族である。『旧唐書』東夷伝には、日本について「倭国伝」と「日本国伝」の二つが立てられている。完成は 945 年である。迴紇(ウイグル)からの渡来人が故郷の名前を記録に残すために命名したと考える。

6 築地山常楽寺の石仏

築地山常楽寺(岡山県岡山市草ヶ部 1806)は備前 48 ケ寺の1 つである。盛時には 20 余の院坊があった。文化年中に堂宇焼失、その後再建。明治 16 年に再び焼失、現在は山門と近年改築された本堂がある。裏山から戦後の開墾時に発見された文英様石仏が 17 体祀られている。高さ 30~80cm の小石仏で、十一面観音像 1 体を除いて地蔵菩薩である。同じ文英様式でも顔の形が様々で個性的である。









文英様式石仏

7 経畦(キョウグロ)経塚





常楽寺経塚

熊山遺跡と同一の石積み遺跡の原型が岡山市草ケ部万灯山の頂上にある。万灯山頂上の字名は経畦(キョウグロ)である。畦(あぜ)を(グロ)と読む。常楽寺では経塚と説明される。石積みの石は大きな岩を割っている。大きな岩を何のために割るのかが解明されていない。山師は岩を割って鉱石を探す、花崗岩は石の目に鏨を打ち込むと容易に割れる。大きな岩を鉄鉱石等の鉱物を探すために割った残骸と考える。

経畦(キョウグロ)との読みは吉備国のみであろう。他に6箇所確認した。

畦をグロと読むのは『**和名抄**』に「畔 田界也 **久呂**一云阿世」とある。『和名類聚 抄』は平安時代中期に作られた辞書である。承平年間(931~938 年)、勤子内親王の求めに応じて 源 順 が編纂した。

- ① 経畦古墳(岡山県岡山市東区瀬戸町鍛冶屋経畦山)
- ② 経畦古墳(操山 96 号墳)岡山県岡山市今谷竹林 山頂
- ③ 経畦古墳(岡山県岡山市御津寺部)
- ④ 経畦遺跡(岡山県岡山市今)
- ⑤ 経畦遺跡(岡山県笠岡市篠坂 三寶院 北ノ坊)
- ⑥ 金場の経畦(岡山県岡山市福田学区)

⑦ 西陣用語 経畦組織(枕ず 単織物の耳組織の一つ。2上がり2下がりの経畦組織で左右の組織を一越ずつずらしたもの。)

7.1 熊山石積遺構分布

1974年の『熊山遺跡 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報』に、3ヶ月間の調査結果として、「石積遺構分布状況」を「山上西半部(ほぼ標高 350m以上)、特に、西側からえぐり込んだ大谷の急崖をめぐる、南の峰が南山崖にかけての一帯に集中的である。」と報告している。標高 350m以上の山上西半部と大谷の急崖に注目したい。

石積遺構分布状況							
	山上西半部	山上東半部	低位のもの	計			
確実・ほぼ確実	25	4	4	33			
参考地	8	1	3	12			
計	33	5	7	45			

熊山山塊に点在する経盛山付近の石積遺構を紹介したい。形状は舟下山 1 号・犬塚石積 遺構と同一である。重要なのは、『熊山遺跡 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概 報』の著者は「方形 2 段の石積」と報告しているが、「方形 2 段」は確認できない。これら が石積遺構の原型と考える。経盛山頂上から南東側に下った尾根中腹岩盤上にも石積があ る。

7.2 熊山遺跡の犬墓





熊山・舟下山1号・犬墓石積遺構

平成23年2月26日の熊山遺跡群調査研究会で犬墓をご案内いただいた。1974年の『熊山遺跡 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報』に「**犬塚**」との伝承が記録されている。

別部の犬(『播磨国風土記』讃容郡)

この鉄を生ずる「十二の谷」を発見したのが「別部の犬(わけべの・いぬ)」だと播磨国 風土記にある。別部(わけべ)も部民の名である。**人でありながら犬を自称**し、犬の子孫 であり、**鉱物を探し出す部民**である。犬を祖先とする氏族である。**犬とは狼である。** 突厥国に狼祖伝説があり、突厥国からの渡来人となる。

和気清麻呂の祖

別部の出身地のひとつが備前国和気郡の和気町である。和気氏の祖は磐梨別公(いわなしわけのきみ)という。別公の部民を別部といいそれが犬と自称していた。つまり**佐用の 鹿庭(神庭)の鉄を発見したのは、和気清麻呂に関わる部民たち**である。

磐梨別公の祖は垂仁天皇(10代崇神の子・イクメイリヒコイサチノミコト)の皇子である「鐸石別命(ヌデシワケノミコト)である。和気清麻呂の先祖には**鐸石別**の名前が書かれている(『日本書紀』)。

弓月君と突厥国

弓月君(ゆづきのきみ/ユツキ)は『日本書紀』に秦氏の祖とされる渡来人である。 『日本書紀』では応神天皇 16 年に朝鮮半島の百済から百二十県の人を率いて帰化とある。 秦の始皇帝五世の孫であり、渡来後、日本に養蚕・機織を伝えた。

秦氏の出身地である弓月国はキルギスのすぐ北方にあり 650 年頃に滅亡している。秦氏 はキルギス周辺から日本へ渡来している。キルギス人は、突厥族やモンゴル族のアジア系 の遊牧民族末裔である。

熊山遺跡の採石は、「石切」ではなく「石割」である。石の目という言葉がある。石の節理や鉱物の方向性により、その部分に力を加えると石が方向性をもって割れやすくなる。地表面に露出した大きな花崗岩がある。花崗岩の露岩が石割の母岩になる。花崗岩は熊山山地の母体をなす基盤岩でもある。カリ長石・斜長石・石英・雲母などから成る。両雲母花崗岩・黒雲母花崗岩・角閃石花崗岩などの種類がある。「御影石」は花崗岩のブランド名である。磁鉄鉱よりも褐鉄鉱を探していたと推定している。

「ただ、それまでイワクラとして崇めていた磐を砕くということは、相当な価値観の変化、 あるいはまったく違った価値観の持ち主でないとできないことではないか。倭人伝でヒミ コが「鬼道」をよくしたとあるように、外来の価値観が旧来の宗教を凌駕したエポックメ イキングが古代にもあったのでしょうか?」と遠山義雄氏は指摘される。岩を割るのは、 新しい渡来人による新しい価値観である。

8 まとめ

- ① 岡山市東区「草ヶ部」に日下郷由来説があるが日下ではなく「草ヶ部」との表記から 「草壁皇子」に注目し吉備内親王と推定した。
- ② 大廻小廻山城の廻(さこ)の語源を「迴紇(ウイグル)」と読んだ。ウイグル(Uyghur)は、 $4\sim13$ 世紀に中央ユーラシアで活動したテュルク(突厥)系遊牧民族である。迴紇(ウイグル)からの渡来人が故郷の名前を記録に残すために命名したと考えた。「草ヶ部」の秦氏とは、突厥国内の迴紇(ウイグル)からの渡来人となる。秦氏の出身地は突厥国である。

9 謝辞

「草ヶ部」の地名の由来については以前より関心を持っていた。長年に亘って「草ヶ部」

を研究されている「くさかべ大池愛護会事務局」の中西 厚氏に平成23年3月より「草ヶ部」とその周辺をご案内いただいた。

10 参考文献

- ①『ふるさと再発見』 くさかべ大池愛護会事務局http://www7a.biglobe.ne.jp/nakanishi/
- ②『大廻小廻山城跡』 岡山市教育委員会
- ③『鬼の城と大廻り小廻り』村上幸雄 乗岡実 1999 吉備人出版
- ④『熊山遺跡 岡山県赤磐郡熊山町史跡熊山遺跡緊急調査概報』1974 熊山町教育委員会
- ⑤『岡山市の地名』1988 平凡社
- ⑥『角川日本地名大辞典 33 岡山県』1989 角川書店
- ⑦『旧唐書倭国日本伝・宋史日本伝・元史日本伝』1956 岩波書店
- ⑧『播磨国風土記』播磨学研究所 1996 神戸新聞総合出版センター
- ⑨『悲劇の宰相 長屋王邸を掘る』大塚初重 1992 山川出版社
- ⑩『新日本地名牽引-1』金井弘夫 1993 アボック社出版局
- ⑪『瀬戸町誌』昭和60年 瀬戸町誌編纂委員会 瀬戸町
- ①『大廻小廻山と日下部郷の遺跡』中西 厚
- ③ 『常楽寺の文英様石仏』

http://www.geocities.jp/kawai24jp/okayama-jyourakuji-bunei.htm